



アメリカで起きた同時多発テロ、それへの報復攻撃といった21世紀型「新戦争」への恐怖に世界がおののいている。その際、「文明の衝突」が「文明間の戦争」を招来したのだというような短絡は避けるべきで、テロを文明に昇格させてはならないが、今日のような世界の現実をまえにすると、異文化理解とか知的交流といった営みは、いかにも迂遠で即効性に欠けるように感じられる。しかし、エドワード・ホールが名著『文化を超えて』で強調していたように、文化を理解し考察しないかぎり部外者にとって異文化はつねに専制的なのであり、そこに外国理

異文化理解と大学



中嶋 嶺雄
国際社会学者

なかじま・みねお
36年生まれ。今年
8月まで東京外大
長。現在、UMAP
国際事務総長。著書に『北京烈烈』(サントリー学芸賞)、『中ソ対立と現代』など。

国越え広がる知の可能性 アジア・太平洋で単位互換

解を妨げる根源があるのだといえよう。
ボーダーレス化やグローバル化が進むなかで、異文化がなおも専制的に立ちほだかっているとするれば、その壁は取り除かれなければ

することになったUMAP(グレートメコン地域大学交流機構)は、アジア太平洋地域で大学間の壁を越えて異文化交流を実現するために設立された政府もしくは非政府代表から成る国際組織である。当面

帯(the Greater Mekong Subregion、GMS)会議」が、タイ大学の尽力によって、この秋口にカンボジアの首都プノンペンで初めて開かれた。つい先年までは戦乱の巷にあり、とくにボル・

で唯一欠席したミャンマーも、今回の会議には強い関心を寄せていた。今日、21世紀型「新戦争」に直面するなかで、他方ではまさに20世紀型「局地戦争」の焦土をようやく復興して知のネットワーク

様々な課題が残っている。教員や学生比率の国際化も著しく立ち遅れている日本の大学の知的閉鎖性を例示するまでもなく、アジアとヨーロッパの間にはまだ大きな隔りがあるのだが、そこを繋いでいくための重要なヒントが、今回の会議で与えられたように私は感じた。

ポト派の犠牲になったカンボジアと越境したヴェトナム、中越戦争で戦火を交えた中国(雲南省から出席)とヴェトナム、それにタイへの親疎の感情が根強いオースの代表らが、同じテーブルで高等教育の重要性や大学間交流の障壁など(たとえば外国語の運用能力の問題)を真剣に討議していた姿は、実に感動的であった。

UMAPは将来、ヨーロッパですでに全学生の約1割が大学間の相互乗り入れを果たし、どの大卒業したかが問われつつあるエラスムス計画とリンクすることによって、世界的な大学間交流のネットワークになることを目指している。この点で広域メコン地帯には、域内の経済的格差や社会システムの違い、多様な文化の共通性と異質性の問題など、克服すべき

ならない。そのために大学や高等教育機関には何ができるのか。オーストラリアの提唱による90年代初頭からの国際的な討論が実を結んで98年のバンコク総会で憲章を採択し、国際事務局を日本に設置

は、アジア太平洋地域の大学間で短期留学生(1年間)が単位互換によって修業年限を遅延することなく交流できるよう支援することが目標になっている。そのUMAPの「広域メコン地

熱心に傍聴しており、GMS諸国

は、域内の経済的格差や社会システムの違い、多様な文化の共通性と異質性の問題など、克服すべき

こうして今日では思わぬ地域から異文化理解のための知のネットワークが広がってゆく。やがては現代世界の不安を和らげ、克服することに繋がってゆくのではないかと。